文明と人間について
の一考察

望月　幸義

1　要約
2　文明の原理
3　人間とは何か
4　人間革命
5　学問及び教育の改革について

1．要　約

現代文明が危機に直面しているという主張がしばしばなされている。危機をもたらしている諸問題の指摘とその原因及び解決策に関する提案等も各方面からなされている。私はより根本的に考えて、文明の原理は分化であると主張する。分化とは簡単にいえば言葉の増えていく過程である。文明化の度合に従って諸分野の言葉が増えてきているのである。ところが、現代は情報化革命により、言葉の絶対量とその流通速度が飛躍的に増大した結果、分化の速度が加速度的となり、文明の諸問題を惹起していると考える。すなわ

ち、文明の変化の速度の急激性も、各方面の多様化現象も、価値観の混乱といわれるものもみなこの分化が原因しているのである。しかし、この分化は必然的なものである以上、これを基盤として思考し対策をたてていかなければならないのである。

文明の危機とは人間の危機である。人間疎外といわれるように人間性喪失の危機なのである。我々の中心課題は、いかにして人間性を回復し、尊重していくかということである。そのためにはまず、人間とは何かを知る必要がある。現状把握があって始めて有効な対策がたてられるからである。ところが人間は定義できないものなのである。それは人間とは思考であり、思考は言葉に依存しているからである。すなわち、言葉自体が定義できない性質をもっているからなのである。その理由は言葉の意味は常に他の言葉の意味と関連しており、一つの言葉を独立させることはできないからである。ここからも人間の多様化は必然的なものとなる。そして人間自身の成長の原理も分化なのである。

人間の分化、多様化は言葉に基づいている限り無限である。無限性を内に秘めていることにこそ人間の尊厳はあるといえるだろう。私の人間革命の主張は、この人間の無限性を積極的に追求促進すべきであるということである。それは精神の技術革新ともいうべきものであり、言葉を換えれば、創造力の飛躍的増大ということである。従って、人間革命が行われるべき分野は、主観的な分野といわれた部分、すなわち、芸術及び宗教の分野である。

文明の原理も人間の構造も人間革命も根本的には言葉に依存している。就学率では世界有数を誇る日本の教育も、その効果という点では貧弱である。その原因は、言葉の教育を中心に行うべきなのに、数学中心の教育を行なっているところにある。学問及び教育改革の中心は言葉の研究と教育の改革が中心である。更に、これと関連して、時代の変化の速度に適応しうるため、学問の総合化が要求される。また、女子教育の振興も欠くことのできない重要な事柄であると考える。

2. 文明の原理

公害、断絶、人間疎外、価値観の混乱、自然破壊、戦争、人種問題、飢饉、貧困、家族の崩壊、集団的狂気等々、現代文明の問題点の指摘は新聞雑誌学術論文等で各方面からなされている。我々の文明はかつてない程の深刻な危機に直面しているという主張もしばしばなされている。つい最近も各国の指導的な経済人、エコノミストからなる国際的な民間組織であるローマ・クラブは『成長の限界』と題する報告を発表している。それによると世界を一つのシステムとしてとらえた場合、その主な構成要素である人口、食糧不足、工業化、環境汚染、天然資源の枯渇は今後いずれも幾何級数的に増加し、その結果、人口の増加や経済成長を適切に抑制しなければ、地球と人類は環境汚染、食糧不足などによって破局への道を突走ることになるだろうといわれている。(注①)

事実として文明が危機に直面しているかどうかについては賛否両論あるだろう。ここではこの問題については触れないで、危機といわれるものの本質について考えてみる。梅原猛も危機感をもっている一人であるが、次のようにその理由について述べている。「私ははっきりいいたい。現代文明は、その原理においてはっきり誤りであるのに、まだ人類はその原理の誤りに気づかず、あるいは気づいていてもおのれのもっている深い悪業のために、この誤った道を邁進している。現代文明は、三つの原理をその内面に秘めている。1．自然を支配するのは善である。2．生産力をあげるのは善である。3．欲望を満たすのは善である。(中略)結局、欲望の満足が、この文明のアルファであり、オメガでもあるが、その結果、人間の欲望は無限に増大し、もはや人間はその内面において収拾のつかない混乱におちいっているのではないか。」(注②) また、トインビーも文明の危機を指摘している。トインビーによれば文明の危機は、人間が人間蟻や人間蜂になってしまうことである。すなわち、人間が機械化されてしまうことである。トインビーはその理

由を次のように考えている。「どう考えてみても、個々の人間能力の現在みられる増加はきわめて僅少なのにたいして、人間生活が現在示している規模の拡大は全く比較にならないまでに巨大である。人間生活の拡張は少くとも三つの次元において常識はずれな増加をつづけている。世界の人口数は急激に上昇している。一人当たりの機械の量および能力は急上昇している。またその破壊力は、これが戦争に振り向けられるなら恐るべき数字となる。」(注③) この人間生活の規模の拡大が、効率的な整理や処理の必要を呼び、組織化を促進する。その結果、人間自身をも組織人とする傾向があるのである。このことをトインビーは、「人類は人間社会とその巨大な産物によって卑小なものと化している。」と述べ、更に、「集団虐殺とまではゆかなくとも、人間蟻や人間蜂に変身する以上に不幸な運命が人間に起こりうるとは考えられまい。」(注④) と警告している。

梅原猛もトインビーも文明の問題点の指摘あるいは文明の本質および原理に関して、鋭く適切な主張をしていると思われるが、私は更に根本的なものとして、文明の原理は分化にあることを主張したい。

文明の原理は分化にあると考える。ここで分化とは一方では細分化を意味し、他方には統合化を意味する。細分化と統合化は反対方向の動きのようであるが、両者ともに言葉が増えるという点において共通しているのである。従って、私のいう分化とは言葉が増えていくことを意味する。細分化の場合、言葉が増えるのは分かり易いが、統合の場合も言葉が増えることが多いのである。統合とは、異なったものの間に、新しい関連性を見つけることを意味するが、統合したものや統合作用を呼ぶのに新しい言葉を用いることが多いのである。文明の進歩発展の過程は細分化と統合、すなわち、分化の過程である。たとえば、色彩の名前、生物学の用語、道具の種類と名前、精神活動(思考)に関する言葉等、あらゆる分野の言葉が増えてきているのである。法学、経済学、数学、医学、文学、芸術その他あらゆる学問の進歩発展はこの分化の過程であるといえる。

分化は必然的に多様化をもたらす。多くの人が指摘するように多様化の現

象が現代文明の特徴の一つであるが、これは分化の一形態なのである。多様化は人間の多様化、価値観の多様化である。価値観の多様化、価値観の混乱などといわれるものも、この分化の一形態である。この多様化は文明の原理である以上、今後も持続していくものである。ヨハン・ガルトウングが未来社会を予想して、「未来の社会はいくつかの思想と、いくつかの制度が同時に許される社会として想定される。これを maximum variety (極大の多様性) maximum choice (極大の自由選択) と呼ぶ。」(注⑤) と述べていることも首肯しうる。

言葉も分化の過程も歴史とともに古くから存在したものである。それにもかかわらず、現代においてなぜ人間および文化の多様性が問題とされなければならないのか、これが問題となる。それは分化の速度が急激になったためであり、その原因は次のようなものが考えられる。まず第一に人口の増加があげられる。人口が増加すれば、多様な人間が生ずることは当然予想し得る。第二に言葉自体の急速な増加である。それは学問及び技術の発展に伴う言葉の増加と、地理的な拡大による外国語との交流の増加によっているのである。第三に印刷機の発達と報道手段の多様化、報道速度の増加等による言葉の使用、流通回数の増加いわゆる情報化革命といわれるものである。第四に教育の普及による各個人の言葉の使用範囲の質的及び量的拡大である。上記のことは、後述する言葉と人間がいかに密接な関係があるかを述べていないので、理解し難いかも知れないが、これらの理由によって人間の多様化が生じているのである。また、上のことを一言にして、情報化革命と呼べば、これが現代社会の変化の急激性の根本原因であると考える。

現代文明の危機の意味するものが、人間疎外ということであるとすれば、分化と人間疎外はどのような関係があるのだろうか。分化は必ずしも人間疎外をもたらすとは限らないが、人間疎外の原因にもなり得るのである。心理学者長谷川浩は、情報化と人間疎外の関係について次のように述べている。「工業化社会は、人間の物質化とか公害病、そのほか幾多の問題を生み出しているが、情報化社会はそれを基盤として人間を徹底的に物質化し商品化す

る危険性をはらんでいる。」(注⑥) なぜそうなるのかといえば、機械の多量化、情報の多量化によって人間は自分自身について考える時間を奪われていくからである。人間の人間らしさは思考と思考力にあると私は考えるが、たとえば、子供や道具をたくさんもっている人は、子供や道具の世話に追われたり、それらを気にしたりして、人間や世界のことについて考える時間が少なくなるであろう。このような道具類と考える時間の多少との関係については分かり易い。しかし、言葉についてもある程度は同様のことがいえるのである。簡単にいえば、言葉も一種の道具なのである。G. ギュスドルフは言葉の性質について次のように述べている。

「言語はあらゆる技術の中でもっとも原初的なものとして現われる。それは物と生物とを操るための経済的な手段を構成する。言葉というものは、しばしば、実在の占有のために道具または武器よりも多く、かつ、またそれ以上に為す。」(注⑦) 従って、情報の多量によって人間が機械化することもあるのである。情報の多量が考える習慣を奪う傾向にあるともいえる。しかし、情報化社会を一方的に危険視することには私は賛成できない。他の一方には情報化社会は人類の知的未来を保証してくれるとも考えられるのである。否、まさにそうしなければならないのであり、そうする方途を見つけることが我々の最大の課題であるともいえるのである。

3. 人間とは何か

文明の危機の問題は人間の危機の問題である。すべての問題の根底にあるのは、人間性の喪失と人間性回復の問題である。ここ数年来各界で人間性を回復せよと要求されているが極めて当然な主張である。なぜならこの世界で最も重要なのは人間であるからである。この命題に対しては異論がないであろう。一見これに反対しているように思われる命題でもよく考えてみればこの命題が根底に存在することが判明するであろう。人間こそがあらゆるものに価値を付与する価値の根源である。しかし、よく考えれば当然であるこの

命題も現実には忘れられているのが普通である。仕事とか財貨のために人間性を犠牲にしている場合が極めて多いといえるだろう。問題はこの最も重要である人間をよりよく尊重するにはどのようにしたらよいかということである。まず人間とは何かを十分把握しなければならないだろう。十分な現状把握の上に始めて適切な方策を立てることができるからである。

人間とは何か。この問題は古くからある問題である。しかし、この問題がより広くかつより深い意味で真に問題となったのはそれ程古いことではなく、二十世紀になってからだろう。近年この問題が強く問われるのは、単に過度の経済成長による人間性の喪失ということからのみ起こったものではないだろう。このことは分化と人間疎外の関係で述べたとおりである。哲学、教育学、心理学等多くの学問は何らかの形においてこの問題を探求してきているといえる。しかし、いまだこの問題について明確な解答を得るに到っていないのである。この間の事情について、ハイデッガーは次のように述べている。「今日ほど人間について多くを知り、様々なことを知っていた時代はない。今日ほど人間についての知識を滲透的かつ魅惑的な仕方で表現した時代はない。今日ほどこの知識を迅速かつ容易に提示しえた時代はこれまでにない。しかしまた今日ほど人間とは何であるかについて知ることの少なかった時代もない。われわれの時代ほど人間が疑わしいものとなった時代はないのである。」(注⑧)

人間とは何かに関する歴史上の学説は哲学者の数だけ多くあるともいわれている。いくつか挙げてみると、パスカルは〝人間は考える葦である〟と述べ、フランクリンの〝道具を作る動物〟、カントの〝自分自身を完全にすることのできる動物〟、ポール・エルンストの〝自分を欺く動物〟等である。(注⑨) 時代的区分によって代表的人間の類型も考えられているが、そこには人間の変遷が窺える。すなわち、古代ギリシャの英知人 (homo sapiens) 中世の宗教人 (homo religiosus) 近世の工作人 (homo faber)、更にホイジンガーのいう現代の遊ぶ人間 (homo rudens) である。また人間の多様性を示すものとして、シュプランガーの類型論がある。すなわち、彼は人間の追

求するものによって次の六つの類型を考えている。①真理を追求する理論的類型人　②利益を追求する経済的類型人　③美を追求する審美的類型人　④愛を追求する社会的類型人　⑤力を追求する権力的類型人　⑥聖なるものを追求する宗教的類型人である。(注⑩)　なお現実の個々人はこれらの類型のどれか一つにはめ込まれるようなものではなく、多少ともすべての類型の混合されたものであり、ただどれかの類型が比較的に際立っていると考えられるにすぎないのである。

現代の代表的な人間観をみてみると、ヤスパースは人間を可能性として捉え、人間に関するどのような像も枠も人間を狭めるものであるとして、人間は人間が知り得る以上のものであると述べている。また、マックス・シェーラーは定義できないことが人間の本質に属すると述べている。(注⑪)　その他現代の人間観の多くは定義できないもの、人間は常に現状をのり越えていくものとして考えられている。結局、歴史的にも現代についていっても多数の学説があり、人間は定義できないということになりそうである。

以上のように人間一般については定義できないとしても、一個人については規定できるものであろうか。すなわち、私とは何であろうか。このように問うのは他人のことは明確に分からないとしても、自分自身のことについては分かるものと考えられているし、人間一般について考えるよりも、私個人を問題にする方が容易であると思われるからである。より重要な理由は、先に人間は価値の根源であると述べたが、より以上に深い根源ともいうべきものは私自身であるからである。自分自身を尊重することができない人間は、決して他人も社会も本当には尊重することができないと考えるからである。しかし、結論的にいえば、この問題も人間とは何かという問いと同様に定義できないということになる。一例として、G・バシュラールの説を引用しておこう。

「ところで個人というものが、学校の哲学が教えるように明確に定義されようとはとうてい考えられない。つまり自己統一についても、同一性についても語られるはずはない。現代物理学の諸問題はひとつの特殊な原子の統一

について語ることもともに危険であるとわれわれに信じさせようとする。個人――すなわち、われわれがそれを把握するそれぞれの水平における、物質の中での、生の中でのあるいは思考の中での個人――とは、記録されない多くの習慣から成る常に可変的なひとつの合計である。(中略)　実を言うと、個人とはすでに偶発事の合計にほかならないのである。」(注⑫)　すなわち、私とは何かといえば、パスカルも『パンセー』の中で述べているように、(注⑬)　私そのもの、私の本質ともいうべきものは存在せず、私とは私のもっている性質であり、判断であるのである。私とは私の所有物、私の容貌、態度、私の交際する人々、私の言葉、私の思想、その他、私に関するすべてのものの総合なのである。

このように、人間あるいは個人はなぜ定義できないのだろうか、結論を先にいうと、それは人間が言葉で構成されている世界に住んでいるからである。しかもすべての言葉は根源的には人間の経験に由来しているため、相対的な意味しかもち得ないのである。従って、人間とは何か、人間の本質とは何かについて確定的な答えを与えることができないのである。むしろ人間の人間性はその個別性のうちにあり、多様化は人間の進歩の現われともいえるのである。これらのことについて説明してみよう。

まず私とは私に関するすべてのものの総合といった場合、その総合されるものは大雑把に二種類に分けられる。すなわち、私の外部世界と内部世界である。外部世界を構成しているものは、私の容貌、外観、服装、態度、住居、所持品、社会的地位、経歴、友人関係等である。内部世界を構成しているものは、私の意識、感情、思考、意志等である。一般に、ある個人を十分に知るためには、これらの外部世界と内部世界をともに知ることが大切であるが、両者を比較した場合、内部世界の方が重要であるだろう。このことはそれ程異論がないだろう。やや極論すれば、人間とは精神であり思考であるということになるのである。このことは更に私の外部世界を構成している事物や私の行動の意味を考えれば一層明瞭になる。基本的には、私に関連しているあらゆる事物の意味は、私にとっての意味をもっているのであり、同じ

事物でも他人にとっては他人にとっての意味があるのである。たとえば、私の服装、髪の分け方、室内装飾等は、私が私の趣味判断、思考によって選択したり加工したものなのである。私がそれらのものに意味を与えているといえる。一般に、すべての事物は一定、固定した意味をもつものではない。たとえば、リンゴは食物であると同時に、石の代用品にもなり、化学実験の材料になったり、美的対象にもなり、あるいはまた、それから宗教体験をする人も稀にはいるだろう。あらゆる事物はこのような性質をもっており、それはその事物を使用する人間の意味付与作用に依存しているといえる。その人間の思考すなわち内部世界に依存しているのである。

このように人間及び個人の中心をなすのは思考であるが、この思考は言葉によって可能なのである。ポール・ショシャールは、本当の人間的な思考は言語なしでは存在しないと述べている。(注⑭) 人間は言語の世界に住んでいるのである。E. カッシーラーは、このことを次のように述べている。

「人間は、ただ物理的宇宙ではなく、シンボルの宇宙に住んでいる。言語、神話、芸術及び宗教は、この宇宙の部分をなすものである。それらはシンボルの網を織る、さまざまな糸であり、人間経験の、もつれた糸である。あらゆる人間の思想及び経験の進歩は、この網を洗練し強化する。人間はもはや実在に直接当面することはできぬ。彼はいわばそれを面とむかってみることができぬのである。」(注⑮) 同様に、G. ギュスドルフは、人間の世界は言葉の世界であることを述べている。すなわち、「言葉の出現は人間の最高権を表示する。人間は、世界と自己との間に、言葉の網をはりめぐらしこのことによって世界の支配者となる。(中略) 物よりも言葉が重要であり、言葉はより高い水準で存在する。人間界は、もはや感覚と反応との世界ではなくて、もろもろの指示と観念との世界である。」(注⑯)

人間は言葉の世界に住んでいるが、言葉は根本的に定義不可能な性質をもっているのである。いろいろ説明の仕方はあるが、G. ヴィオーの次の説明は簡単明瞭なので引用する。「概念は決して孤立して存在するものではない。なぜなら思考するためにはその概念と関係のある他の概念が必要となる

のであって結局或る概念はそれと関係のある他の概念との関連においてのみ存在し得るものであるからである。概念的思考のこの特徴は辞書を引いてみても明らかにわかる。辞書である単語の定義を探し出すと、その定義を明らかにするために、他の単語を引く必要が生じ、かくして次々に同じことを繰り返さねばならぬ。そして人間の全知識をかき集めても、ある単語の意味を決定的に定義することはできず、われわれは永久に一つの単語の意味の完全な定義に到達し得ないことになるであろう。(中略) 概念のこの相互連関性によって〈われわれの概念的思考は一つ一つその網の目が個々の概念に相当する大きな連続した網を形成しているのである〉。」(注⑰) このように言葉相互が網の目を形成して連関しているから、厳密にいえば、一つの新しい言葉が生まれたり新しい意味が生じたりすると、それは他のすべての言葉の意味に影響を与え、変化させることになるのである。この結果、すべての言葉に、不変の定義を与えることは不可能になるのである。従って厳密にいえば、人格自体も常に変化していることになり、人間を定義することは不可能となるのである。この結論は好かれ悪しかれ、我々がそこから出発しなければならない基点である。ここから出発して、人間性の中心は個別性にあること等、主張したいが、項を改めて人間革命ということで述べる。

4. 人間革命

人間の革命とは人間の人間性を飛躍的に増大させようとするものである。技術革命は叫ばれて久しいが、人間の精神の技術革新を主張しようと思うものである。要点を簡単に述べれば、人間の本質はその多様性にあり、その多様性の質的、量的な差は無限であるので、人間は無限の発展を目差し、かつまたそのように人間を教育すべきであるという主張である。これらのことについて説明していく。

まず、人間と動物の差は言語能力の差にあることが判明している。我々は人間に生まれついたために、人間であることを当然のことと考えているが、

人間と動物の差は驚異的である。人間だけがあらゆる動物からかけ離れた能力をもっている。我々はもっとこの差の大きさに驚くべきである。この差の根本的原因は言語能力の差なのである。G．ギュスドルフは次のように述べている。「猿の発育が停止し幼児のそれが飛躍的になる瞬間が、またたく間にやってくる。比較は無意味になる。猿は断乎として動物でしかない。幼児は本当の人間に接近する。けっきょく両者を絶対的に分離する限界は、ここでは、言語活動の差である。」(⑱)

この人間と動物の驚くべき差は単にそれだけにとどまらない。人間同士の差もこの言語能力の差により必然的なものであり、その差は極めて大きなものになる可能性があるのである。先に文明の原理は分化であると述べたが、人間についての差も分化なのである。

私は人間革命を主張して、人間同士の差、すなわち個別性の伸長を強調するが、その理由は次のようなものである。まず第一に、人間の差は避けることのできないものとして、除去することのできないものとして存在するということ。第二に、人間が価値の根源であり、何ものにも替え難い価値を有しているのは、人間の個別性にあるからである。このことについて説明しておく。個人個人の人間は決して他のものでは代替できないものである。一回限りの生命である。個人個人の生命が尊いのは代替のきかない一回限りのものだからである。人間が皆極めて類似しているものであれば、他の人で代用することもできるが、代用できない大きな理由は、それぞれの個別性があるからだと私は考える。個別性こそ人間性そのものともいえる。G．W．オールポートは、一人一人の人間は、一個の特異性（特殊語法）であり、人類の構文規則（一般性）をあきらかにやぶっていると述べ、この個性間の差は、動物の種差に相当する程大きなものであると述べている。(注⑲) この点従来の学問は人間を一般論で扱いすぎた嫌いがあり、不十分な点が多いと考える。私が個別性を強調する第三の理由は、個性化は文明の進展と軌を一にしていることである。分化は人間の個性化の過程でもある。総じて文明の進歩は団体中心から個人中心に移行してきているといえる。国家とか社会のこと

を中心に考える団体的思考法から、自分自身のことを中心に考える個人主義的思考法に移行してきているのである。このことは後進国のことを考えれば分かる。そこにおいては個性よりも団体が尊重され、住民は常に団体の秩序に従って行動しているように見受けられるのである。総じて、主体性というものは、歴史の発展とともに確立されてきたものなのである。同様のことは個人の成長の過程についてもいえる。自我というものがはっきり自覚されてくるのは、幼年期ではなく、青年期においてである。この自我の自覚化、意識化が個性の中心をなすものであるが、文明の進歩が多様化、必然的傾向を伴うと同様に、個人の成長もより一層の個性化を必然的に伴うのである。外的影響からいっても、おのずからそうなるのであるが、私が人間革命を主張するのは、この傾向を主体的積極的に推し進めることをいうのである。

どの人間の進歩も無限に可能であると思う。人間が真に尊いのは、どの人間もこの無限の可能性を内に秘めているからだと考える。この人間の無限性を保証しているのは、人間の中心をなしている言葉である。このことをP・シャールは次のように述べている。「サルは、（中略）教育の可能性は少く、知性の進歩は著しくない。人間では逆に本能が抑えられ教育と知性の発展が目立ち、脳の完成以前にさえそれが前景に立つ。これはまったく言語習得の賜であり、それによって完全な人間となる。言葉をかえれば、無限の進歩が可能になる。」(注⑳) この人間の進歩の無限の可能性は脳の使用度ということからも主張し得る。いろいろな研究により、脳細胞と言葉とは極めて密接な関係にあることが分かっているが、この脳細胞はほんの一部分しか使われていないようである。「あえて憶測を試みた専門家の見解では、人間はその高度な脳の力のほんの小部分しか使っていないということである。それは最もしばしば引用される数字によると実現可能な能力の2％から5％となっている。」(注㉑)

次に、人間革命の中心である個性化はどのような分野においてなされるべきか、このことについて考えてみる。人間及び自然的社会的事象は合理的に説明できる明瞭な部分と合理的には説明しづらい不明瞭な部分に分けて考え

ることができる。大雑把にいえば、理性に関係している分野は明瞭であり、情緒に関係している分野は不明瞭であるだろう。人間及び諸事象に関して、明瞭不明瞭両部分のうちどちらの部分が多いかは問題であろう。私個人としては、はるかに不明瞭な部分の方が多いと考えている。一般に、文明及び学問の進歩とはこの不明瞭な部分の明瞭化への過程を考えられてきた。しかし、これは一面的な真理であるだろう。確かに文明及び学問の進歩とともに明瞭な部分は増えてきたが、同時に不明瞭な部分も増えてきたのである。文明の原理である分化は明瞭な部分に関する分化と不明瞭な部分に関する分化の両方を含むのである。両方の部分が共に分化しつつあり、共に重要なのである。これまでは明瞭な部分の分化が強調されてきた感があるが、私の人間革命はこの不明瞭な部分の分化を目差すものである。このことを学問と関連させて述べる。

学問もまた大きく二つに分けて考えることができる。比較的明瞭な言葉で、明瞭な部分を扱う学問、たとえば数学、物理学、生物学、経済学等一般に科学といわれる学問と比較的不明瞭な言葉で不明瞭な部分を扱う学問、たとえば、哲学、文学、歴史学等多くの人文科学の学問に分かれる。言葉自体は前述したとおり、究極的には定義できないものであり、不明瞭さというものを完全に除去することは不可能であるが、比較的にいって明瞭な言葉と不明瞭な言葉に分けて考えることができるのである。実在物に関する言葉や数字あるいは実在物や数字に対応させることのできる言葉（たとえば物理学で用いる力とか電流の強さ等）は比較的明瞭な言葉である。これに対して、人間の精神に関する抽象的な言葉、たとえば親切、愛、美、平和、真理等は比較的不明瞭な言葉である。不明瞭な言葉は、個人個人によって意味の差が激しいのである。科学一般や客観的学問といわれているものは比較的明瞭な言葉を使用しており、芸術一般や主観的学問といわれるものは不明瞭な言葉が中心となっているのである。私は人間性の中心をなしているものは不明瞭な分野の言葉であると考える。とすれば、決して客観的なものを否定するつもりはないが、主観性もまた同等にいやそれ以上に尊重されなければならない

と考える。これまで学問の進歩は客観性をあまりにも重視しすぎた嫌いがある。人間疎外の根本的原因の一つは過度の科学主義あるいは主観性の軽視ないしは否定にあると考える。主観的なものに比べて客観的なものはある意味では易しいと思われる。私は学問はまだ幼稚な段階にあり、これまでは比較的易しい分野が発達してきていると考える。客観的分野の学問の発達は人類に対してさまざまな貢献をなしてきた。その結果、学問とは明瞭化、合理化への過程であるという考え方が一般的になってしまったと思われる。人間には明瞭な部分と不明瞭な部分があるのに、明瞭な部分が大部分を占めているように考え始められたのである。その結果、人間の個別性よりも共通性を重視することになり、人間の画一化、機械化をもたらすことになったのである。実存主義者を中心として、科学主義に対して疑問がもたれ始めたのはこうした事情からであろう。しかし、前述のとおり、人間の人間らしさはその個別性にあり、換言すれば、愛とか道徳とか誠実とかいわれる部分にあるとすれば、比較的不明瞭な部分にこそ人間性は求められるべきなのである。この主張が正当なものであるとすれば、学問の目的に対して新しい重要な一項を加えなければならないだろう。すなわち、学問は不明瞭な部分の分化をも扱うものであるということである。このことは私の主張する学問及び教育改革の根底をなすものである。人間革命とはこの不明瞭な部分の徹底的追求とその発展である。川喜田二郎が「人間革命で要請されたのは、知的な側面のみでなく、むしろ感情の深みと欲求のうごめきまでを含めた、人間の生きる姿勢の変革でありました。しかもそれを外から押しつけられるのでなく、内側から確立、少くも納得でなければならなかったのでありましょう。」（注㉒）と述べているのは、この不明瞭な部分の改革をも含めた総合的人間改革を主張している点で適切であろう。また、カミュは、生きることは不条理を生かすことであると述べ、それは何よりもまず、不条理を見つめることだと述べている（『シジフォスの神話』）のも同じ趣旨である。また、市川亀久弥やトインビーが、これからは芸術、宗教が発展するだろうと予測しているが、以上述べてきたことから首肯されるのである。

次に価値に関連させて人間革命を説明する。私は自分の生命を最も充実させて生きることが至上の幸福であると考えている。生命を最も充実させるということは、生命を意識的及び無意識的（または精神的及び身体的）行動の総和と言い換えて、この総和を最も価値あらしめることを意味している。すべての人は必ずある価値観をもっているだろう。その価値観にもとづいた行動はいわば価値生産にあたる。私の人間観は、全行動の総和、すなわち総価値生産を最大にすることが最も優れた生き方であるという考え方に基づいている。商品生産の場合には技術革新による生産力の飛躍的増加ということが常に叫ばれてきた。同様なことが人間の精神についていわれてしかるべきである。私のいう人間革命は精神の技術革新である。ある価値観にもとづいた価値生産の量の増加でなく、価値観そのものの改革を求めるものである。価値観の技術革新が効果的な方法において可能であるためにはあらかじめ価値の上下関係が決まっている必要がある。この問題は極めて難しい問題であるので簡単に述べることはできないが、ここでは参考のために、M・シェーラーの価値の序列を挙げておく。同氏は次の5つの事柄を基準にして、高い方から宗教的価値、精神的文化的価値、生命価値、快適価値、有用価値の序列をつけている。5つの基準とは、①永続的価値ほど高い、②非分割的な価値ほど高い、③他の価値によって基礎づけられない価値ほど高い、④感受した際に与えられる満足の深い価値ほど高い、⑤現存在に限局されることの少ない価値ほど高いということである。（注㉓） 価値の序列が明確にならない場合でも、価値観の変革をするという意識をもつことが人間革命にとって重要なことであると考える。

更にまた、人間革命を別の表現で述べてみよう。人間の生きがいは喜びにあると考える。喜びの中心には感動がある。強い感動の際には我を忘れるとか、別世界に生きているという感じになる。感動の要素は驚きであり、発見であり、あるいは悟りであるだろう。私はこれらを含めて一言で創造と呼ぶ。すなわち生きがいの中心となるものは創造である。人間革命とは創造力の飛躍的増大を目差すものである。創造力の問題は現在脚光を浴びていると

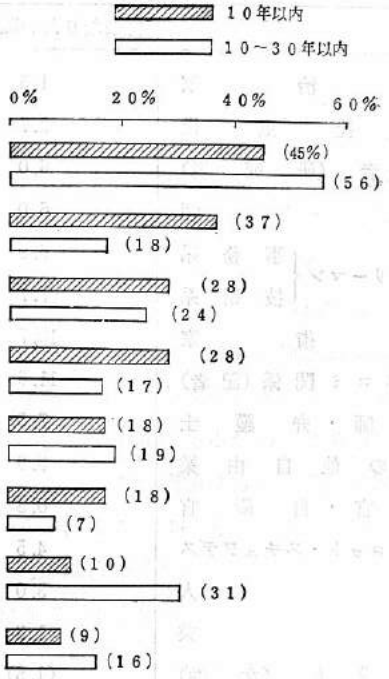
表① 日本リサーチセンター　　昭和45年10月調査

	将来なりたい職業(%)	やりがいのある職業(%)
政治家	1.5	6.5
会社重役	2.7	1.0
学者（研究者）	6.0	6.2
教師	6.0	9.0
サラリーマン 事務系	6.9	4.4
サラリーマン 技術系	7.7	4.5
芸術家	10.7	15.1
マスコミ関係（記者）	11.6	6.9
医師・弁護士	7.5	14.1
その他自由業	8.9	5.6
警官・自衛官	0.8	1.3
パイロット・スチュワデス	4.5	4.0
商人	3.0	1.8
農業	1.3	4.4
看護婦（女性）	(1.5)	(6.9)

いえるが、多様化、個別化と深い関係があるので当然だろう。

表①に示すとおり、昭和45年10月に行なった日本リサーチセンターの調査結果からもこのことがわかる。すなわち、将来なりたい職業、やりがいのある職業もともに芸術家が上位を占めているのである。また、最近科学技術庁がまとめた技術予測の中で、〝これからどんな種類の人間が必要になるか〟というアンケートの結果が表②である。これはデルファイ法と呼ばれる調査方法に基づいて、今後10年以内とそれからさらに20年以内にどんなタイプの人間が必要になるかを約5百人の産業界、学界、官界、言論界などのリーダーに予測してもらったものである。その結果〝創造力〟の評価が断然高いことが分かると同時に、〝専門的知識〟への要求が相対的に低下し、〝調整

表② これから重視される教育の目的



能力〟が重視されていることが注目される。ここで創造とは何であろうか。ヴァン・ファンジェも川喜田二郎も創造とは既存の素材を新しく組み合わせることであると述べている。創造力と創造力の開発促進に関する書物は多く出版されているが、簡単に述べると、私は思考力と想像力が創造力の根本であると考える。従ってここでもまたつきつめていくと、言葉と言葉に対する能力が根本なのである。

5. 学問及び教育の改革について

国家の方向を長期的にみて根本的に決めるのは学問であり教育である。文明の変化の速度は加速度的に増えつつある。時代の変化の速度に適応しうる

ように学問及び教育の改革が切に要請されるのである。学問及び教育改革は世界的機運であるといえる。1968年にアメリカで〝世界教育危機会議〟が開催されたり、国際連合によって1970年を国際教育年とすることが決定されたり、その他教育改革に関する出版物の増加等、教育改革に対する要望は強まっている。日本の最近の調査結果によっても、約9割の人が戦後日本の教育を根本的に考えてみる必要があると答えている。こうした教育改革の機運の根本原因は文明の変化の速度の急激性にあるのである。私は以下日本の学問及び教育の改革について述べるが、学問と教育を分離しないで述べる。両者は極めて密接な関係にあるし、両者に亘る改革の要求が多いからである。

まず、学問及び教育の目的をはっきりさせる必要がある。真理のための学問、科学のための科学ということではあいまいである。学問も教育もともに人間のためにある。従って、両者の目的は人間尊重ということになければならない。

次に、学問及び教育改革の根本は、言語に関する研究と言語教育の重視ということにある。前記第2章、第3章、第4章に述べたとおり文明の原理も人間の中心をなしているものも人間革命を促進するものもすべて言語に依存しているからである。J.Z.ヤングは文明も人間の進歩も言葉の進歩によるものであると次のように述べている。「個人、または民族の〝通信〟の歴史を辿るならば、子供から老年への個人の生涯と、原始人から現代にいたる社会制度の歩みとの底に流れる何ものかを知ることができる。それは脳の〝通信〟の進化と、個人と社会の進化の相互関係であるというだけのことではない。人間は、どんな段階でも〝通信〟の型式に大きく支配されてきた。しかし、〝通信〟は手段である筈で、人生の目的ではない。したがって、脳の規則を改善してゆくことによって、すなわち、〝通信〟の型式を進化させてゆくことによって、よりみのり多い人生と社会をつくり上げることが、不可能ではないということを、個人と民族の歴史はわれわれに告げているのである」(注㉔) また次のO.F.ボルノーの言葉は、言語教育が全教育の中心であることを適切に述べている。「人間にとっては、世界は言葉の姿に合わせて形成

されます。言葉を新たに正確にすることはすべて同時にかれの世界を拡げ且つ豊かにすることであります。これは外部世界のみでなく内的な精神的心理的世界に関しても同様です。子どもが外部世界を名づけ、言葉で把握することを学ぶにつれて、その子どもにおいて外部世界が整理されると同様に、彼の内面もまた、言葉による表現に即して分化し、形成されてきます。喜びや悲しみ、愛や忍耐、退屈や期待、実直や自負、これらすべては言葉が人間に用意する語の導きのもとに形成され、そしてこの過程の内で彼の内面が形成されるのです。(中略) こうして言葉を通じての言葉をもってする教育において、われわれは同時に全人を教育するのであります。また、それだからこそ、言葉の教育は全教育の核心なのであります。」(注㉕)

表③ ノーベル賞受賞者国別人数表 (1971年まで)

国名	物理学	化学	生理学及び医学	文学	経済学	平和賞	合計	人口(1971年)(単位百万)
アメリカ合衆国	29	16	38	6	2	16	107	205
イギリス	15	18	17	7		8	65	56
ドイツ	13	22	9	5		4	53	59
フランス	8	5	8	12		8	41	51
スウエーデン	3	4	2	6		4	19	8
スイス		3	4	2		8	17	6
オランダ	5	2	4		1	1	13	13
ソ連	6	1	1	4			12	244
オーストリア		1	5			2	11	7
イタリア	2	1	2	3		1	9	54
デンマーク	1		4	3		1	9	5
ベルギー			2	1		4	7	10
ノルウエー		1		3	1	2	7	4
日本	2			1			3	104

表④ 主要国における人口千人あたりの高等教育機関在学者数

国名	最近年度		1964年度
	年度	在学者数	在学者数
日本	1969	16.2人	10.2人
アメリカ合衆国	1968	34.7	25.9
イギリス	1967	6.2	4.4
フランス	1967	10.6	7.5
西ドイツ	1967	5.8	5.3
ソ連	1968	18.9	15.9

日本は世界有数の教育国家であることは知られている。初等、中等、高等教育機関への就学率はアメリカ合衆国と肩を並べて世界最高といえるのである。しかし、教育効果という点になると悲観的にならざるを得ない。この事実を示す例を二つ挙げてみよう。表③は欧米を中心としたノーベル賞受賞者の国別人数表である。日本は絶対数において少ないばかりでなく、同表に示した人口との割合を考えに入れれば極めて少ないのである。更に、表④に示されているとおり、高等教育機関在学者数も、欧州諸国に比べて多いのである。ノーベル賞受賞者が少ない原因は、地理的、社会的な原因、語学力の障害等教育以外の原因もいろいろ考えられるだろう。また、ノーベル賞受賞者の数だけが教育の効果を示すものでないことも確かである。しかし、少くとも、世界的にみて一流の人物を出していないことも事実であろう。もう一つの例を出してみよう。表④は主要国における人口千人あたりの高等教育機関在学者数である。(注㉖) 表⑤は主要国における人口十万人あたりの大学院の学位取得者数の推移である。(注㉗) この二つの表の示しているとおり、日本は在籍者が多いにも拘らず、大学院の学位取得者数は少ないのである。これは単に量的な問題であるが、これに質的な問題を加味すればこの格差はもっと開くことが予想されるのである。この根本的原因は言語教育の量的質的な欠陥にあると考える。

表⑤　主要国における人口10万人あたりの大学院の学位取得者数の推移

国名	学位	1965	1966	1967
日本	修士	6.0人	7.6人	9.2人
	博士	3.9	4.3	4.7
	計	9.9	11.9	13.9
アメリカ合衆国	修士	72.5	75.2	89.3
	博士	9.4	10.1	11.7
	計	81.9	85.3	101.0
イギリス	修士	5.5	7.4	9.4
	博士	6.3	7.0	8.2
	計	11.8	14.4	17.6
フランス	博士	10.4	11.8	13.0
西ドイツ	博士	11.8	10.5	13.5
ソ連	修士	8.4	9.4	10.1

私は他の小論文（注㉘）で日本の教育では頭が良くならないことを示した。その要点は次のようなものである。まず、頭の良いということの意味が誤まっているのである。頭の良いということが尊ばれなければならないのは、最も大切なことを教育は教えるべきなのであるから、それは人間尊重の能力ということにあると考える。しかし、日本では頭の良いことは、人間尊重の能力というよりも極論すれば、良い大学に入学でき、良い就職ができる能力と考えられている感がある。J．ピアジェが、知能は適応であると述べ、適応とは、生活体の環境に対する活動と、その反対の方向の活動、すなわち、環境の生活体に対する活動との均衡、と述べている（注㉙）ように、知育、徳育、体育、情緒教育の、すべてを含んだ総合的な意味で知能は考えられなければならないのである。これらの中心となるものは思考力であるが、それは言葉に依存していることは既に述べた。大雑把にいえば頭のよくなる教育の中心は、国語教育にある。ところが日本の教育は数学中心の教育になってい

るのである。この根本的原因は日本の経済的貧困によるものであろう。それが他の後進国家にもみられるように、明治政府の欧化政策、殖産興業政策、実用主義となり、戦後の経済第一主義、科学主義につながってくるのである。さらに、副次的ではあるが、重要な原因は国立大学の入学試験の科目編成とその配点比率にあると考える。徐々に改められる機運にあるとはいえ、合格の正否は文科系についても理科系についても、数学や理科系の科目の出来如何によって決まっていたといっても過言ではないだろう。点差がつきやすいものとそうでないものがあるから、同じ配点では不合理なのである。従って、国語で点差をひらいて合格しようと考える人は稀であったのである。参考までにフランスの国家試験バカロレア資格試験の試験科目と配点指数を表⑥に掲げる。（注㉚）

表⑥　バカロレア資格試験　（1966年および1967年）

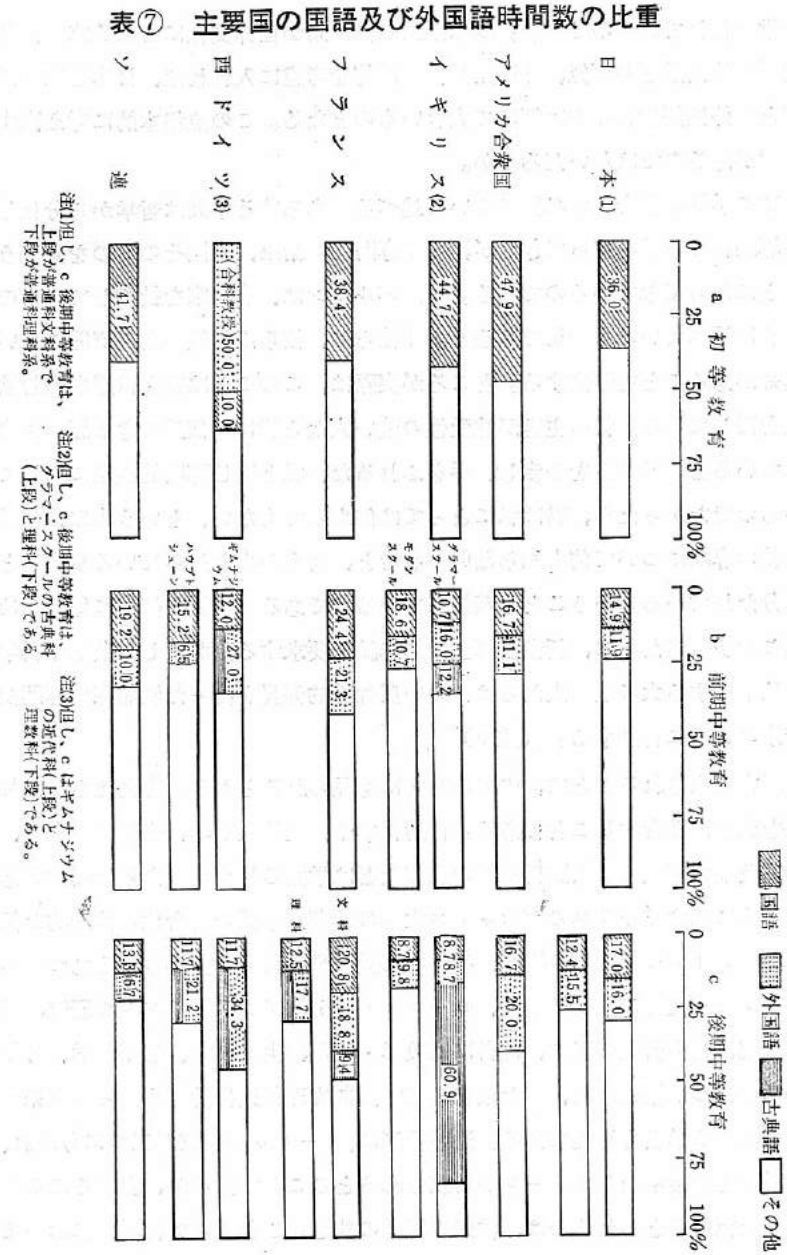
	哲学科		実験科学科		基礎数学科	
	筆記（配点指数）	口述	筆記	口述	筆記	口述
国語	2	-				
哲学	4	3				
国語または哲学	-	-	3	2	2	-
歴史・地理	-	3	-	2	-	2
第一外国語	-	2	-	2	1	1
第一外国語または古代外国語	2	-	-	-	-	-
第二外国語または古代外国語または数学	-	2	-	-	-	-
数学	-	-	3	-	4	3
数学または物理	-	-	-	2	-	-
物理	1	-	2	-	3	3
博物	1	-	2	2	-	1
体育		☆		☆		☆

注　数学技術科と技術経済科は省略　☆印　体育の配点指数は定められていない。

更に、後期中等教育までの国語も数学もともに暗記科目であるといってよい。それにもかかわらず、たくさんの事柄の暗記を要する国語のできる人は努力型で、少しの事柄の暗記ですむ数学のできる人が頭がよいとされるのは全くの不合理である。このように努力軽視の教育になっているとしたら、その損失は莫大なものであろう。この真に頭の良くなる教育を行なっていない弊害はさまざまな形であらわれている。第一に、大学入試前後あるいはそれ以前に頭のよしあしが決まってしまうように考えられる結果、終身教育という考えが欠如してしまっている。先述したように、知能が総合的能力であり、その核心が言語能力であるとすれば、頭は、一生を通じて良くなっていくものであり、また、良くしていくべきものなのである。第二に、数学優位の風潮とそれに伴う努力の軽視は、人文科学の貧困をもたらしている。それは同時に、情緒の問題、すなわち芸術の能力を、個人の趣味の問題、または生まれつきの素質の問題としてしまっている。したがって芸術の能力は十分な意味で教育の問題となっているとはいえないのである。また、芸術及び人文科学の貧困は、女子の能力の軽視となっており、女子の能力の伸長を阻害していると思われる。次にわが国の国語教育の遅れていることを示す。

表⑦は主要先進国とわが国の初等中等教育における国語及び外国語の全教科における百分率である。単に量的に見ても、全段階において日本は国語の時間が少ないのである。更に、質的にも「わが国の小・中学校における国語と各国の国語について比較してみると、わが国では読み方、書き方、聞き方、話し方、文法、文学等をすべて含めて教育しているが、これらをそれぞれ独立、あるいは、そのいくつかを統合した科目として教育している国が多い」（注㉛）といわれる。この点考慮しなければならないだろう。ここで、外国語教育についても述べておく。国際間の交流は日増しに緊密になりつつあり今後も増加していくだろう。したがって、あらゆる問題は、世界的な水準で考えることが望ましく、また要求されていくことも自然の勢いである。世界的水準で思考していくためには、英語だけの語学力では不十分であり、少くとも独語、仏語の能力が望まれる。この点も先の表⑦にも見られるとおり、

表⑦　主要国の国語及び外国語時間数の比重



注1)但し、c後期中等教育は、上段が普通科文科系で下段が普通科理科系。

注2)但し、c後期中等教育は、グラマースクールの古典科（上段）と理科（下段）である

注3)但し、cはギムナジウムの近代科（上段）と理数科（下段）である。

非常に遅れているのである。欧米諸国の自国語が世界文化に占める位置、自国語と外国語との類似、外国語修得環境等を考慮に入れれば、日本と欧米諸国との外国語能力の差は極めて大きいものとなる。この点根本的に考え直す必要があるのではないだろうか。

次に学問の綜合化の必要について述べる。あらゆる学問は哲学から分化して専門化の過程を辿ってきたが、その専門化の結果、人間そのものを見失うことになってきているのである。J．バルザンは、専門家を批判して、次のように述べているが適切であろう。「彼らは、彼らの知識の島の周囲に広い無知があることを告白する。ところが実際は、このことは差別待遇を望む欲望を隠している。彼の主題が感受性の強い人なら誰にも伝達できる原理を含んでいるということを否定し、手をふれるな、私と同じ専門的職業に属しているのでなかったら、君は私にとっては何ものでもない、という人は、世界が彼の専攻について何も知らない多数者と、何もかもを知っている少数者とに分たれているということを確信しているのである。種族を純粋に保つためにこの少数者たちは、新参者に全面的忠誠を要求する。かくして芸術や科学の仕事をする大多数の人たちは、強い反知性的偏見を持った嫉妬深い専門技術家のように行動する。」(注㉜)

現在要求されることは、先掲の表②にも見られるとおり、専門化された知識を調整、綜合することである。行動科学や、文化人類学、未来学の台頭、興隆及び大阪大学の人間科学部の設置などは学問の総合化のあらわれである。次に示すイギリスのサセックス大学の改革は学問の総合化の代表的な例である。「サセックスの場合、それぞれ関連する科目で構成される九つのスクール——文化には英米研究、ヨーロッパ研究、アジア・アフリカ研究、教育研究、社会研究の五つ、理科には数学・物理、生物科学、応用科学、分子科学の四つが編成され、また最初の二年間に文理科連携計画があって両系統にまたがる学習も可能である。近い将来に、ヨーロッパ研究が二つに分かれ、〝科学と社会〟なるスクールが新設されるとのことであるが、要するにこのような編成がとられるのは、従来の視野の狭さをふき払って、現代において

必要とされる生きた知性、今日の文化と科学の進展についての広く深い理解に裏づけられた新しい知性を、学生たちの間に主体的にはぐくもうとする姿勢のあらわれと見られる。」(注㉝) また、文部省が決めた他大学での単位取得をも認める、単位の互換制度は学問の専門化、閉鎖性打破という点からいって画期的なものであろう。これはまた、去る昭和45年にＯＥＣＤの教育委員会が〝日本の教育政策に関する調査報告書〟の中の特に大学改革についての次の要望事項に基本的に応じているものと考えられる。その要望事項とは、「①東大、京大を頂点とするピラミッド型の大学の構造を改め、大学間の上下の序列をくずすべきだ。②教授の公募性の採用をはじめ、人事、教育方法に柔軟性を取入れよ。③すべての入学希望者に大学の門を開き、入学後の試験で不適格者をふるい落とすといった方法を含む大学入試の改革に取組め」(注㉞) といったものである。学問の総合化ということは哲学の再建ということでもあり、言語教育の充実と軌を一にしているのである。

学問の綜合性への要求は、芸術の振興までも含まなければならない。前述のように、それは芸術が人間性に深く根差したものであるからである。それはまた前述の客観性に対する主観性の権利回復の主張でもある。アンリ・シモンはこのことについて次のように述べている。「私の意図は、科学の領域における客観的知識の価値をおとしめることでは決してない。(中略) しかしはたして、思考し、行動する意識的な人間を特徴づける唯一のものが客観的知識であるのかどうか。これははっきりと決めてかからねばならぬ。また人間が彼自身の最大の高みにおいて存在するとは、単に彼の純然たる脳細胞、知性、合理的に思考する彼の機械的構造といったレベルで存在することにすぎないのか、それともそうではなくて、中枢神経系統の至高の機能とは、生命的なもの、情感的なもの、また精神とじかにふれ合うものから、直観という存在にさかのぼっていこうとする衝動を、観念及び価値として、合理的動機として、自由な行為として解釈し、調和させようとすることなのか、そのいずれであるのか決めてかからねばならない。換言すれば、主観性とは深淵な人間存在の地帯であり、そこでそれは固有の自然であるとともに、正統

な支配権を有していることをみとめないかぎり、理性的で寛大な倫理と、その支えとなるべき哲学ははたして考えられるだろうか？」。(注㉟) 更に、芸術は創造力の中心的に働く領域であることや、前掲の表①に見られるとおり、芸術家志望が多いことからいっても、芸術教育は重視されなければならないだろう。さらにH. リードが『平和のための教育』において、「道徳を実行する教育とは、芸術の訓練による教育のことである」(注㊱) と述べていることを付け加えておく。

その他学問教育に関する問題はさまざまなものがある。たとえば、国立私立をとわず、各学校間に多様性をもたせる必要性、教育者養成に関する諸問題、言葉と脳細胞の関係、言葉と感覚、言葉と道徳の関係等、言語に関する諸問題の研究とその教育法に関する問題、幼児教育、コンピューター導入と視聴覚教材の問題等々である。しかし、私は日本にとって、欠かせない重要な問題は女子教育の振興であると考える。日本においては古来伝統的に、男子に比べて女子は低い地位におかれてきた。その結果、人間としての女子の能力の伸長もはばまれているといえる。女子の能力は教育の普及と、機械化、情報化時代の進行とともに、家事労働の軽減等の理由により、伸びつつあるといえるが、より積極的に助長すべきであると考える。女子もまた何よりも人間として存在するのである。従って、人間として女子も教育され、個性化される必要があるのである。その結果は、日本の発展にとって測り知れないものがあるであろう。このことは先進国の女子学生の就学率からも当然予想しうる進行であり、要望であろう。これは表⑧に示すとおりである。(注㊲)

表⑧　主要国の高等教育機関における女子学生数の比率

日本	1964 1969	22.9% 28.4%
アメリカ合衆国	1964 1968	38.7% 40.5%
イギリス	1964 1967	40.3% 44.5%
フランス	1964 1967	43.7% 44.0%
西ドイツ	1964 1967	28.3% 30.4%
ソ連	1964 1968	43.0% 47.0%

注

① 昭和47年3月22日　朝日新聞朝刊記事

② 昭和47年1月21日　毎日新聞夕刊所収、梅原猛論説〝現代文明の悔い改め〟より

③ 社会思想社出版『知識人の良心』所収　アーノルド・トインビー著論文〝人間——不屈なラバ〟38頁

④ 同上　40頁及び42頁

⑤ 昭和45年4月2日　読売新聞夕刊記事

⑥ 早坂泰次郎編『二十世紀人の心理学』朝倉書房所収、長谷川浩論文〝情報化社会の人間学〟187頁

⑦ ジョルジュ・ギュスドルフ著、笹谷満、入江和世共訳『言葉』みすず書房、18頁

⑧ マルティン・ハイデッガー著、木場深定訳『カントと形而上学の問題』理想社　225頁

⑨ ヴェルナー・ゾンバルト著『人間について』　4頁

⑩ シュプランガー『生の形式』より

⑪ 山崎照雄著『倫理学序説』第一評論社 94頁
⑫ G．バシュラール著、掛下栄一郎訳『瞬間と持続』紀伊国屋書店 87頁
⑬ パスカル著、前田陽一、由木康共訳『パンセ』中央公論社 196頁
⑭ ポール・ショシャール著、吉倉範光訳『言語と思考』白水社 12頁
⑮ E．カッシーラー著、宮城音弥訳『人間』 35頁
⑯ G．ギュスドルフ著、前掲書 14頁
⑰ G．ヴィオー著、村上仁訳『知能』白水社 81頁
⑱ G．ギュスドルフ著、前掲書 13頁
⑲ G．W・オールポート著、豊沢登訳 51頁
⑳ P．ショシャール著、前掲書 40頁
㉑ ジョージ・ギャラップ著、南博訳『創造する頭脳』講談社 40頁
㉒ 川喜田二郎著『パーティ学』社会思想社 80頁
㉓ 金子武蔵編『倫理学辞典』弘文堂 265頁 価値の項
㉔ J．Z・ヤング著、岡本彰祐訳『人間はどこまで機械か』白楊社 112頁
㉕ O．F・ボルノー著、浜田正秀他訳『新しい教育と哲学』玉川大学出版部 224頁
㉖ 文部省作成『わが国の教育水準』、昭和45年度 36頁
㉗ 同上 40頁
㉘ 道徳科学研究所編『社会教育資料』第61号所収論文
㉙ J．ピアジェ著『知能の心理学』より
㉚ 山内太郎編著『世界の教育改革』第一法規所収、手塚武彦論文〝大学入学資格制度の改善（フランス）〟 111頁
㉛ 前掲『わが国の教育水準』 61頁
㉜ J．バルザン著、本多顕彰訳『知性の運命』紀伊国屋書店 12頁
㉝ 昭和45年8月12日 読売新聞朝刊記事
㉞ 昭和45年10月28日 朝日新聞朝刊記事
㉟ ピエール・アンリ・シモン著、戸田吉信訳『科学とヒューマニズム』筑摩書房 140頁
㊱ H．リード著、周郷博訳『平和のための教育』岩波書店 46頁
㊲ 前掲『わが国の教育水準』 37頁